

エリザベス・ボウインの短篇小説

石 本 キ ミ

エリザベス・ボウイン (Elizabeth Bowen 1899) の短篇小説を讀んでみると、ものをより明瞭に見せてくれる殆ど透明な幕を透して舞台を眺めてゐるような気がする。而し舞台と言へばそこで演じられる劇は台詞で始まり、且台詞で終るといふ風に考えられるならばこの表現は当たらない。何故ならば彼女の短篇の中的人物は比較的少しの台詞しか持たない事が屢々あるからである。そしてその台詞は凡そドラマティックでないからである。而し兎に角彼女の短篇小説は將に舞台に展開された一景であり、或ひは二、三場の演出でもある。それらの場面に時には眩しい程の照明が向けられたり、時には一条の淡い光で一部分を照し出したり、又は俳優に長い影法師を黒々と壁にうつさせ不気味な雰囲気醸し出す事もある。そこに登場する無邪気な子供等にも悲しみがあり、若い人々にも不安があり、大人ともなれば自らの足許にある深淵に慄然としてゐる人々が多いが、それが不安な現代の社会に生きてゐる人々の姿である。こういふ人はよくある。人生とはこんなもの。之でも人は平氣を装つて生きて行けるといつたような作品が多い。プロットの運びに巧みな筆を用ひて読者の興味をギリ

／＼の所まで引摺つて行き、息を吞ませたり弾ませたりした揚句の果にはホツとさせはするが、なんだ馬鹿々々しいとガツカリさせるような効果を狙ふ短篇小説とは又別の存在である。彼女の短篇小説は彼女独特の鋭い感受性によつて捕えた現実を、デリケートな心遣ひによつて構成し、巧みな話術によつて語られた作品である。

ボウインが一九二三年に初めて公にした本、「Encounters」は短篇小説集でそれから一九五一年「The Shelbourne」といふ歴史に関する著作の発表に至る二十七年間に七つの長篇小説を公にしその間を縫つて六つの短篇集を出してゐる。その他自叙伝、評論集、隨筆集、歴史等の著書もあり、なか／＼多作である。現在もなほイギリス文壇の持つ最大の女流作家、小説家として真摯な歩みを続けてゐる。そも／＼作家として彼女が評価され認識されるようになった出発が短篇小説集「Encounters」であり、それに続く第二の発表「Anne Lee's」(一九二六)も又短篇集であつたといふ事はこれ等作品の一つ／＼が後のより優れた作品、より大きな作品を書くための創作的経験であり修練であつたと言ふ事が

出来る。“Encounters”はその表題の示すとほり遭遇、即ち何処かめぐり会ふような人々といふ意味で、其処に示されてゐるのは作家が想像の中に或ひは実在の世界に見たであろう人々の群像である。それは一九一〇年代から二十年代の初めにかけての英国人の姿を描出したものであるが、又現代社会の何処にでも見られる人間の偽りない姿であるから、私達の興味をひくのである。ポウインの人物は概して女性が多いが、子供を好んで物語の主人公としたり脇役としてゐるので子供の描写に妙手を持つてゐる作家との定評がある。而し面白い事に初期の作品には子供を取扱つたものは余り多くはなく、寧ろ作者の当時の年令——“Encounters”は作者が二十才から二十二才にかけての作品である——よりはずつと年上の人物とそして取りもなおさず作者の当時に於ては未経験な心境や事件を取扱つたものが多い。そして彼女の後期の作品の中には小児や成人の境地に達しかけた若い男女の心理を取扱つたものゝ多い事に気付くのである。しかし“Encounters”の巻末を飾つてゐる“Home Coming”の一篇は既にこの時代に於てもポウインは子供の内面的な描写に細緻な筆致を試し後の作品に於いてのこの分野の成功を予告している。小学生ローザリンドが学校で受持教師から褒められ、皆の前で読まれた作文を持つて意気揚々と家路につく所から始まつてゐる。家に近づくにつれてDarling-bestと呼び慕つてゐる母への思ひが募つて来るのであつた。母親とは何時も家に居て自分の帰りを待つてゐて呉れる筈の人、二階の窓から門の方を眺めながら自分を迎えて呉れる人だと思ひ込んでゐる娘は空しい窓辺を見上げて何かしら不吉なものを直感す

る。玄関の扉を開けた瞬間身に痺と感ずる空虚さは何によつても紛らす事が出来ず悶々の時間を過す。女中が機嫌をとつてお八つを出してくれても何故母が出て行かないように見張つてゐてくれなかつたのかと腹を立てゝ了ふ。一体どんな服装で出かけたのかしらと母の衣装戸棚を開いてあの服この帽子の存在を確認してゐる時に、突然母は自分を棄てゝ逝つて了つたのだといふ絶望的な邪推に愕然として了ふ。この娘の苦悶も知らぬ氣に母親は買物の包を小脇に抱えて門の扉を排して砂利の小道に足音を立てながら綻びそめた水仙に笑顔を向けながら歸つて来たが、依怙地な小娘は唇を噛みしめながら身を窓辺に潜ませてちつと隠れて母の様子を観察してゐた。あれほど憧れてゐた母の胸に飛び込んで行く氣になれない。母親が娘の名を呼びながら家の中を探してゐても出て行こうともしないで母親の粉白粉を涙で濡れた睫や頬につけて表情を隠して了ふ。「遅くなつて悪かつたわね。」と一応謝まりはするが娘のふくれ面を見て「母さんは何時も家に許りは居られないのよ。そんな意地悪しちや駄目。」と窘められて了つた。ローザリンドはもう決して作文の事を母親に知らせてあげるものか「本當だつたらこのお部屋が暗くなつて行く頃、二人で窓に腰掛けてローザリンドは作文を読みながら頭を母さんに凭れかけてゐるんだけど。」と何も彼もが台無しだつた。この作品は富裕な家庭の独り子として育つたこの作家が幼時に体験したのであるう感情を置き換えたものと思われるが、微笑しい母親への利己的な偏愛の記録である。同じく第一集中の“Daffodils”は子供といつてもローザリンドよりは遙か年長の高校の女生徒が三人束になつて女教師の

家の窓の下を通つてゐるのを見つけられてその教師から家の中に招き入れられる場面のスケッチ風な短篇である。女教師が主人公で女の子達はその相手でありコントラストをなしてゐるだけである。女教師は陽は照るが風の強い三月の花である水仙に対して抱く抒情的な気持を少女等が少しも解しない事や、彼等が独創性に缺けてゐる事に対する不満が一方に在り、他方には伸びくゝと成長した彼等の若さに対する嫉妬を振ひ除く為に虚勢を張つて見せ、自宅に居ながらも教場に居る時の身構えに戻りがちである。作者の焦点はこの教師に合わされ、少女等は教師の先入主を持つた眼によつて全く外面的に眺められてゐるに過ぎないから全く樂天的 'Cinema-bred romanticism' と教師に評される通りの姿で平面的に描かれてゐる。しかし前のローザリンドに於て、作者はその焦点をその幼い心に集めてゐたから細い感情の動きや魂を揺すぶる程の激情をもちつきりと跡づけてゐる。

"....The sense of insecurity had been growing on her year by year. A person might be part of you, almost part of your body, and yet once you went away from them they might utterly cease to be. That sea of horror ebbing and flowing round the edges of the world, those tides were charted in the newspapers, might sweep out a long wave over them and they would be gone. There was no security. Safety and happiness were a game that grown-up people played with children to keep them from understanding, possibly to keep themselves

from thinking, that was what made grown-up people queer. Anything might happen, there was no security" (p. 172 Encounters)

彼女には不安定な気持が年毎にだん／＼と募つて来てゐた。ある人があなたの一部分、あなたの躰の一部のような気がするかも知れない。でも一旦あなたがその人から離れて行つたら、その人は居なくなつて了ふかも知れないのだ。世界の端々を取巻いて満ちたり退いたりしてゐるあの恐ろしい海——潮の満干の事は新聞によく図表で出てゐるけど——の大波が打寄せてその人たちをのみ攫つて行つて了うのдарう。ちつとも安心なんか出来やしないのだ。安心とか幸福などといふものは大人が子供の相手になつて遊んでくれるゲームなんだわ。そうして遊んでもらつてゐる間は子供の気持は紛れてゐて大人を愛てこにするものが何だかつてことも判らないし、又考えようともしないんだわ。どんな事が起るか判りやしないんだもの、安心なんか出来／＼ないんだわ。」

"I don't know that she's dead. I'd better get used to believing it, it will hurt less afterwards. Supposing she does come back this time; it's only for a little. I shall never be able to keep her; now I've found out about this I shall never be happy. Life's nothing but waiting for awfulness to happen and trying to think about something else. (p. 174 Encounters)

「母様が死んだかどうかわからないけど、死んだやつたと思ふ

ことに慣れた方がいゝと思うわ。その方が後で余計辛い目に遭はないで済むわ。今度は母様帰つていらつしやるにしても、それはほんの一ときの事だわ。もおずうつと母様を捉えておく事は出来ないでせう。こういふ事が判つちやつたんですもの、もう私は仕合せにはなれないわ。恐ろしい事が起るのを待つのが人生なの。そして恐ろしい事を考えないように、他の事を考えようと努力するのが人生なのよ。」

之が十二才の子供の懐疑的な人生哲学である。作者がこの小品に意図したものは親一人子一人の家庭の溺愛や独占慾ではなくて単純な信頼を持つ筈の娘が瑣細な事から生に対して抱く不安や惶惧そして絶望の表現である。ポウインの不安に戦く人間像はこの様な子供に限らず老若男女の種々な年齢層を含んでゐるが、多くはポウイン自身の属する上流階級、或ひは中流の上の階級に属する人物が多い。その中でも殊に子供の描写に巧みと言われるのは子供の子供らしい生態を巧く写し出してゐるといふ意味ではない。

“For my generation grown-ups were the ruling class. As an only child I had lived very much among them, noted as closely as possible their ways, and tried in my reading to keep abreast with books they seemed to admire, which were of many sorts. Moreover, I was being continually shifted from household to household, in and out of varying social groups to and from between Ireland and England. This made me diplomatic, and imitative. All through my youth I lived with a submerged fear that

I might fail to establish grown-up status; and that fear had probably reached its peak when I started writing.
(Preface to Encounters)

「私の世代にとつては大人は支配階級であつた。私は独り子だつたから大人に立ち交つて暮し、出来るだけつくぐと大人のする事に注意した。そして読書に於てひけをとるまいとして大人が感心するらしい種々の本を読む事に努めた。その上私はアイルランドとイギリスとの間を往き来して家から家へと多様な社交のグループへと始終連れて行かれた。このため私は社交的になり真似が巧くなつた。青春時代を通じて私は成人の状態には成れないのではないかしらと言ふ事を秘かに恐れて生きて居た。この恐怖は著作を始めた頃絶頂に達してゐたらしい。」

と序文の中に告白してゐる事によつて、又短篇小説第五集“Look At All Those Roses”の中の子供を取扱つた作品によつても、ポウインは上流階級の大人が自分達の享樂や虚栄、伝統を保つために敢て子供の夢も叫き潰してしまふことへの抗議と共に、子供も大人と同じように、又希望に燃えてゐる筈の青年等もそれごく宿命的な abyss を持つてゐる事を訴えてゐる。それが大人である場合より無邪気な子供であれば猶更痛ましい効果を納めるのである。第三集“Joining Charles”中の“Dancing Mistress”の中の祖母育ちの女の子 Mergery Mannering は教師の憎悪を敏感に感じ、「先生は私を殺し度がつていらつしやる。」と思ふし、教師の方でも、「一度でいゝからあの児を殺して見度い。」と思ふ程に火花を散らしそつな師匠と小さな弟子とを取り巻く多くの踊り

子供がリズムに乗つてシャンデリアに輝き大鏡に反射させながらホテルの舞踏室でぐる／＼回転しては集り散つては又踊る有様を目の当り描写している。下手な弟子を念入りに指導せずには居られない教師の良心的な気持からのみではなく憎悪からの指導に、幼い子供はいぢけながら跳りつゞけて遂に眩暈を訴える。そして教師の夢の中では遂に息絶えて了ふが、之も大人の感情の残酷な犠牲である。なほこの様に大人が子供に与える脅威は第四集“*The Cat Jumps*”(1934)の中の“*The Little Girl's Room*”の十才のGeraldineがよく表してゐる。彼女は両親は無くとも祖母の家に引き取られて何不自由なく可愛がられ、その美貌を楽しみにされて我儘に振舞つてゐながら、夜毎に彼女が仇敵と呼ぶ一団の人々、即ラテン語の教師、数学の教師、死んだ母、村の悪戯少年、近所のおこりんぼの女、植木屋等々が挙つて来て寝る前の幻想に表れ彼女を苛みつゞけるのである。手に／＼ナイフをきらめかして彼女につめ寄つて威嚇するので遂に彼女はバタリと膝をかゝめて降服して了ふ。こうした幻が去つて了ふと彼女は平靜に帰るが、そんな現象に気付かない祖母は孫娘の彼女に与えた部屋を一つの誇りとして泊り客をそこえ案内し部屋の美しさや娘の美しさを誇示してゐる。子供部屋が何か落ち着かないことをかすかに感じつゞも寢床に這入つてゐる少女の「池のように静かな眼を満足気に覗き「あんた、嫌な事は何も無いわね。」と云つてゐる。それでもこの部屋の息苦しきを感じて、

“...she opened the window wider, to ask more night in.

She put a bowl of flowers outside the door: by night

flowers were enemies. Her own idea of peace filled the room: the child's bed became the very image of sleep. (Her own sleep came in tablets out of a bottle.) Night between these colourless walls became as spacious and pure as a sky, in which her own solid form and Clara's seemed miraculously to be suspended.”

「彼女(祖母の事)は夜をもつとこの部屋に招じ入れるために窓をより広く開けた。花を活けてある鉢を戸の外に出した。花は夜の間は仇であつた。彼女の考えるような平和がこの部屋に満ち／＼した。この兎のベッドは將に睡眠のイメージとなつた。

(彼女の睡眠は壘から取り出す睡眠薬の錠剤に頼つてゐた。)ぼやけた色の壁に取り囲まれて夜は天空のように広々とし淨らかになり、その中で自分のゴツ／＼した姿とクララ(祖母の客人)の姿は不思議にも宙に浮いて感じられた。

そしてクララといふ祖母の友達は「私あんなの歳だつたらねえ。」と彼女の若さ否稚なさを羨望してゐる。此処でも大人と子供があまりに対照的であり、大人が子供のために尽してやつてゐるといふ安心と、子供の関心事とが完全にづれてゐるために子供は全く孤独である。大人の落着き払つた様子に幻の仇敵の脅した流血の革命はまだ始まつて居ない事を感じるが、「扉が閉まり、彼等が立去ると縁飾りの附いた枕に安堵の嘆息をつき、再び彼女の牢獄で眠りについた。」と美しい少女の痛ましい寝顔を浮き上らせてゐる。

又第五集“*Look at All Those Roses*”(1941)中には更に

多くの子供の姿を彷彿させてゐる。巻頭的一篇“Reduced”の中の幼女ベニーとクロロディアが家庭教師のミス・ライスに献げる尊敬と憧憬。天を震撼させた犯罪の嫌疑を受けたミス・ライスを格安な契約で雇入れた吝嗇家の父親。子供と教師が実によく行つてゐるといふ実状よりも容疑者であつた人に子供を托する事を恐れる母親。そして彼等に世間を代表する客人を配して話を進めて行く。話の筋は極めて簡単であるが、ボウインのこの時代の短篇小説の技巧は全く堂に入つたもので、人物に語らせる妙い言葉に充分な暗示を含め聯想をかき立てつゝその物語の世界をはつきり現出してゐる。Carbny 家の邸宅 Pendlethwaite はこの世紀になつても電燈の設備もない旧式な屋敷で万事は節約を旨として管理されてゐる干乾らびた家で近隣の人も滅多に出入りしないよな所であるが、母親にも親しみのもてない二人の娘が家庭教師と住んでゐる棟はそれなりに楽しい場所である。此処でも大人の御都合主義によつて形造られた世界が偶々子供を仕合せにしてゐるのに、又もやその幸福も大人によつて切り崩されて行く事に対しての子供の小さな反撥が明暗の色濃く描かれてゐる。又テニスの詩“Princess”の一節“Tears, Idle Tears”を題とした泣き蟲坊や Frederick とその母親 Mrs. Dickinson とが Regent Park を散歩する情景の描写の間に健気な D 夫人の経歴を巧みな話術で語つてゐる。航空士の夫が不慮の事故に遭つて病院で死んだ時、D 夫人は毅然として涙も零さなかつたが帰宅して赤坊の Frederick が無心な眼で母の顔を眺めてゐるのを見ると急に声をあげて泣きつゝけたといふ事。赤坊はそれでも何も彼も判つてゐ

る様な顔をして母親を見てゐたといふ事。その後大勢の求婚者を斥け続けて唯 Fredy を一人前の男に育て上げる事に生き甲斐を感じて居る事なども聞かせてくれる。りゆうとしたなりの美しい人が、犬でも連れて歩いた方が相しいのに泣き蟲坊やを連れて歩くとは似つかわしくない。しつかり者のこの母親は泣き喚く坊やを見せしめに置いて先に行つて了ふ。子供はその後を追ひながら池の辺を歩き岸近く白鳥が泳いでゐるのを見て手を延してそれを掴えようと懸命である。其処に居合せた女の子に声を掛けられて芝生を踏んでゐる事を注意されたり、今し方まで泣いてゐた訳を訊かれたり、枝檜を貰つてかぶりついたりしてゐる中に気持が落着いて来た。この見知らぬ女の子から彼女の同僚だつた男の子で矢張り泣き癖のある人の話を聞かせて貰つてゐる中に全く平靜になり、向ふの方から迎えに来た母親の方へスキップの足どりで馳けて行き、白鳥が捕えられそうだつたと上機嫌で報告してゐる。公園にゐた女の子は自分の同僚の青年の泣き腫らした顔を思出して、

“The eyes of George and Frederick seemed to her to be wounds in the world's surface, through which its inner, terrible, unassuageable, necessary sorrow constantly bled away and as constantly welled up.”

「ジョーヂやフレデリックの眼は彼女にはこの世の奥深くに潜んでゐる痛ましくて慰めることも出来ない、避ける事も出来ない悲しみが絶えず血となつて流出し、絶えず湧き出て来るような気がした。」と云つてゐる。

即この六才の子供の目と何処かに勤務してゐる事務員で泣けて

「仕方がないといふその青年の目とが人類の悲しみの捌け口みたいなものであるとするのは、人間を悲しみや悩みを背負ふものとしてのボウインのベシミステイクな見方である。

ボウインが短篇小説で出発した時代即“Encounters”の段階に於てはまだ「スケッチ」即小品文と短篇小説との相違がはつきりしてゐなかつたと自ら認めてゐる。そして一旦“Encounters”が出版されて、二三の批評家によつてスケッチ集であると評された時、彼女は名誉を毀損されたような気がしたと云つてゐる。当然この本はスケッチと短篇小説のコレクションと評するのが正しいと。スケッチにはプロットがなく従つて又短篇小説にはある所の心理的な転換がない。“Encounters”中の“Breakfast”“The Lover”“Daffodils”“Lunch”等は明らかに全くスケッチであり、その他にも作者が当時は未知であつた伊太利のコモ湖を背景とした“Requiescat”や“Sunday Evening”等のように純然たるスケッチではないが、スケッチ風の物語りもある。勿論短篇小説を分類してプロットを主としたもの、性格を主としたもの、背景を主としたもの、テーマを取扱つたもの、ムードを主としたもの等に分ける事が出来るが、之は全く便宜的な分類の仕方である。一つの短篇小説がどの部門に属するかを判定するためにはその作者がプロット、性格、背景、テーマ (theme) ムード (mood) のいづれに最も多くの言葉を用ひ、最も強く効果を納めてゐるかといふ事を検討しなければならないが、ボウインの最初の短篇集を評してスケッチ集だと言つた人々が誰であつたか知らないが、彼女のこの作品集の中には人物の性格、或ひは背景、又はムードの描写

に主力を注いだ短篇小説が多くあるといふ事を指摘したのである。第三集に於ても矢張りこの傾向は見られる。その表題になつてゐる“Joining Charles”は若夫人のルイズが寒い朝まだき暗い中に起き出でて夫チャールズの生家の人々と別れてリオンに居る夫の許え独りで旅立つて行くところのスケッチである。ルイズのまだ成熟しきれない若々しさ、大人である姑の前に出るとまだ幼い娘にしか見えない感じは作者が自分は成人の状態に達する事が出来ないような気がしたといふ意味の事を言つてゐるのを想起させる。普断ルイズが気味悪がつてゐる片眼の猫が先づ彼女の寢室の扉の下からもれる蠟燭の灯をたよりに音づれ頻りに体を磨り寄せて別れを惜しみ、次には義妹のアガスがお茶を持つて来て彼女の旅装を手伝つてくれる。最後の荷物を纏めながらこの家の寵児である夫とこの家との長いつながりを彼女は回想し又今日の旅を予想して見る。姑のレイ夫人は彼女を実の娘のようにいとほしんで嫁が息子の許へ行つて息子を仕合せにしてくれる事を喜ぶと同時にこの幼げな妻に何か悩みがありはしないかとそつと慰めるように労るように訊いて見る。「二年経たないうちに帰つて来るでせうね」と母に云われると若い嫁は何時この夫の生家に又帰つて来るか等といふ事を考えても見なかつたのは不思議な気がするのであつた。するとルイズは話好きの夫の妹メイシイが勧めてくれる朝食を摂りながら幻想に耽つて了ふ。「未来のおぼろげな光の中を」まるで見知らぬ人のように White Hall を音づれて玄関で呼鈴を鳴らしても誰も出て来なかつたり、或ひは赤坊を腕に抱いてこゝに帰つて来ると三人の妹たち、ドリス、

メイシイ、アガーサがとり巻いて大はしやぎをしたり赤坊をつゝいたりする。お姑おぢさんが出て来たので赤坊を手渡ししようとする、もうちよつとの事で下に落つことしそうになる。ふとはじめて赤坊の顔を見るとそれは夫チャールズの顔であつた。といふような過去と現在と未来そして幻想とが不思議に美しく背景である所の *White Hall* にからみ、そして背景が人物のムードに解け込んでゐる精緻なスケッチである。前に触れた "*Dancing Mistress*" も大人と子供に对照的な効果を狙つた心理の描写で何といつても第一集の習作的な段階を脱出して彼女独特の作風を持つようになつたを認める事が出来る。それは即ち人物と背景とが不思議な程完全に融合してゐる点である。読者は讀後時間が立つてその物語の中にどんな人物が居たかといふ事を忘れて了つてもその作品の *Atmosphere* は何時でも記憶の中に再生する事が出来るといつたような鮮な印象を与え、深い感銘を覚えさせるような作風である。第六集の題名となつてゐる "*Look At All Those Roses*" に於て若い文士とその愛人が週末の旅の帰途自動車の故障のため余儀なく、美しく咲き乱れてゐる薔薇の家に吸寄せられるように立寄つて男が乗物の処置を講じに出掛けた間ルウは其処で数時を待つてゐる。この家で見たいものは脊髓を痛めて立つ事も出来ない少女と頑丈な母親であつた。相手欲しやの少女の言葉の端々から何となく感じられる父親の行方に関して忌わしい疑念が持たれた。而し娘にあまり引留められるので猶更男の帰りがもどかしかつた。遂に借物の自動車で男を迎えに来たのでホッと安堵の胸を撫でおろし、貰つて帰る筈の薔薇の切花もそこへ別れを告げて

花の咲く家を去つて行く。男も近くの町でこの薔薇の家にまつわる兎角の風評を聞いたので案じてゐたが相手の無事を喜んでゐる。絢爛さの中にある痛ましき、無邪気な娘と犯罪の匂との对照は人物のある背景を非常にはつきりと浮び上らせその中のヒロイン、ルウは男とびつたりしないのでロンドンのアパートに帰つても当分は面白くないのだがといふ当初の気持は全く解消されて只管に無事を喜んでロンドンに顔を向けるといふそれだけの心の動きを取扱つてゐる。前に述べた "*Tears, Idle Tears*" "*Reduced*" や極く短い "*The Girl With a Stoop*" それから "*A Walk in the Wood*" 等いづれもスケッチと心理描写とが周到な心遣ひによつて結び合され、背景とその雰囲気の中で、その雰囲気を持つ魔力的な気分作用されて人物の内面に起る変化を表現する行動を精細に書いてゐる。ボウインは純然たるスケッチ小品に出發し自らの優れた技術に最も相応しいタイプの短篇小説に發展させて行つたのである。"*Encounters*" の再版（一九四九年）に當つて附した自序の中に初版の頃を回想して言つてゐる。

....I did not know the stories of Hardy or Henry James; I may have heard of Chekov; I had not read *Mau-passant* because I imagined I could not read French....
With regard to the short story, Katherine Mansfield was not only to be the innovator but to fly the flag; since *Bliss* the short story has never been quite ignored. I read *Bliss* when I had completed that first set of my stories which were to make *Encounters*... then, admira-

tion and envy were shot through by a profound dismay: I thought, 'If I ever am published, everybody will say I imitated her.' I was right: this happened."

「私はハアディヤヘンリー・ヂェームズの短篇小説を知らなかつた。チェホフの事は聞いてゐたかも知れない。仏蘭西語は読めないと思つてゐたのでモーバッサンは読んで居なかつた。短篇小説についてはキャサリン・マンズフィールドは新機軸を出したとけでなく大きな功績を残してゐる。彼女の作品「幸福」以来短篇は決して軽視されてゐない。私は自分の短篇第一集に納められる筈のものを仕上げた頃に彼女の「幸福」を読んだ。——そして賞讃と羨望との念に深い驚愕の気が貫いて来た。「もし私の作品を発表したら、私は彼女を模倣したと皆は云うであろう。」と私は考えた。私の考えた事は正しかつた。その通りになつて了つた。」

ポウインとキャサリン・マンズフィールドの作品の類似点は作品中の眞実性とか、女性らしい鋭い感覚、細かい心づかひ、精緻な表現などである。

兩人共孤独や失望、哀愁、諦観、幻滅等々短篇小説に扱ひ得るものをそれ／＼の作風に従つて取扱つてゐる。両者の創作過程に於ける根本的な相違はマンズフィールドの方がより聴覚的でポウインの方がより視覚的であるといふ事である。前者の作中の人物は台詞が多く、その台詞は宛ら現実の人の話す言葉を用ひてゐるが、後者の人物は比較的少ししか語らないし、語る事は實在の人間が語るであろう言葉とは稍異り、寧ろ作者が語らせる言葉を話

すのである。地の文章が精細であるのに比して台詞は直載簡潔である。マンズフィールドは人物が語るべき事で語らなくても了解されるため省略した事を点線 (dotted line) で表したり、赤坊の発する意味のない音声や小鳥の囀りまでもふしまわしこそ文字に留められないが読む人が知らず／＼に節をつけ調子を出して読み度くなるような風に文字に表現してゐる。マンズフィールドの創作過程に在つて聴覚的なイメージの方がより活潑に働いてゐるが、ポウインの創作過程に於ては視覚的なイメージが多分に活躍してゐる。

マンズフィールドが会話によつて雰囲気や醸成し会話によつて小説を運んで行くのに対して、ポウインは細かい観察や彼女独特のはつきりしたイメージを画布に描き彼女の感受性といふ特異な技法によつて按配した色彩を施し、克明な明暗をつけて、極めて立体感のある不思議にも印象的な絵画に仕上げてゐる。まさに印象派の画家の資質を文字によつて表現してゐると云ふ事が出来る。印象派といふ言葉は何かしら模糊とした感じといふ風にとられる恐れがあるが、この派の画風は模糊どころではなく瞬間的に捕えたものを彼等の嚴しい科学的な理論に基いた方法によつて彩り表現する事を試みてゐる。ポウインはより長い時間の経過の間に、より複雑な心理の変転を取扱ふ長編小説に於てよりは、限られた長さの短篇小説の形式の中に於て、纏つた描写に専念し、些末な事も偶然に委せるといつたすきは少しも見せてゐない。自然の様相、季節、時、明暗、家のたゞずまい。庭、屋内、人物、服装等々についての細部の描写は凡て雰囲気や醸成を期しての事であ

る。その中でも彼女の光と暗に対する感覚の鋭さは殊に顯著である。

“...He saw the family in silhouette against the windows; the windows looked out into a garden closed darkly in by the walls. There were so many of the family it seemed as though they must have multiplied during the night; their flesh gleamed pinkly in the cold northern light and they were always moving often like the weary shepherd, he could have prayed them to keep still that he might count them.” (Breakfast)

「彼は家族の人々が窓を背にして影絵のようになってゐるのを見た。窓は暗く瞬に取囲まれた庭を見晴してゐた。家族はあまり大勢なので夜の間に殖えたような気がした。彼等の膚は北向きの光線の中で桃色に光つてゐた。そしていつも動いて許りるので、彼は疲れきつた羊飼のように彼等の頭数を数えたいからぞつとしてゐてくれと頼み度いような気持であつた。」

之はボウインが初めて手がけた作品の最初のバラグラフの一部であるが、部屋に這入つて来た人に「半面像ハルメンになつてゐる家族の人々を見た」といふ表現の中に窓、庭、冷たい北側の光線等を含む環境の中に人々を認めてゐる。人物と背景が一つに解け合ひ、色や光線が明瞭に示されてゐる。光と闇との対照的な背景の中に運ばれてゐる短篇は“Firelight in the Flat”でボウインにしては珍らしく貧しい人々の物語である。

朝、妻と小ぜり合ひをして気まづく出かけて行つた夫が暗くな

つて六階のアバートの我家へ帰つて来ると戸は開いてゐるが妻は居ないし、灯がついてゐないし、お金が無いので燈をつける事も出来ない。ロンドンの小規模のアバートではメーターに一志を入れればそれだけ分の電力が使える仕組になつてゐる。誰もゐないと思つてゐると消えかゝつた暖炉の側の椅子に妻の友達である若くてだらしのない娘が来てゐる事が判り二人で暗がりの中で話をしてゐる。ときどき道端を走つて行く自動車のライトが六階まで反射するのと勢なく燃える炉の火では何もはつきり見えないので作者は描写の手をゆるめて、専ら会話のやりとりをしてゐるが、暗い所で考えることは不健康な事許りである。マッチを擦つて戸棚探しをして少し許りのあまり物を二人で仲好く頒け合つて食べて空腹を忍んでゐると、やつと映画から妻が帰つて来て小錢を探して電燈をつけてくれた。借金をするのが目的でこの家に忍び込んでゐた娘に一志貸す事は出来たがこの三人は三つ巴のたまし合ひをしてゐるようなものである。オーヘンリーの物語を思出させるようなきび／＼とした扱ひである。ボウインは喜劇的な人物も描いてゐる。第三集の“Mrs. Moysey”はチョコレートチョコレートの美麗空箱を山のように自分の部屋に貯めるお婆さん。“All Saints”の Mrs Barrow は凡ての聖者を描いた裝飾ガラスの大窓を教会に寄進し度い資産家。“A Queer Heart”中の Mr. Cadman は極端な利己主義者、等々冷笑的に書かれてゐるのは年配の頑固な女達許りでしかもこの世の何所かに見られそうな人々である。

ボウインが短篇小説に於て試みた事は現実を叙述する事である

と云つてゐる。そして彼女の現実とは読んだ事のある凡ての書籍を含むと云つてゐる。彼女が書齋で机に向つてゐる時、背後の棚にぎつしりとつまつてゐる本、それが現実の限界であり、彼女はものを書く事によつて現実の限界をもう一段階広げようとしたと述べてゐるのは、作家は経験と空想だけで書くのではない。文学は人生からのみ生れるものではなく又文学そのものから由来するものであるといふ事を裏づけてゐる。彼女は大学に行かなかつたと言つてゐるが文学の遺産は充分に受け継いでゐる。知的教養の豊かな、意識的に良心的な多くの作家に洩れず否そのいづれにも優つて彼女の作品は生々しい人生の直接的描写であるよりは創作家としての態度と技巧の繊細な飾によつて漉された産物だと思わざるを得ない。ジョイスやウルフの開いた小説の新しい分野を前衛派とするならば、ポウインはその新しい潮に流される事なく、又それをむげに反撥するでもなく彼女独自の方法によつて彼等の試みた心理過程の叙述をも取入れてゐる。環境が人間の心理に作用する陰翳のデリケートな描出はまさにヘンリー・ジェームズの後継であり、正統な現代英国小説の流れを伝承しつつ一歩前進の歩を踏み出したかの観がある。勿論ポウインにはその道の大家としてどの様な主題でもどの様に規模の大きなものでも書きこなせる能力があるとは思えない。而しマンスフィールドが意識してゐたと同じ様にポウインも自己の能力の限界と、女性である事の特殊な利害を常によく弁えて賢明に自己の可能な範囲を守つてゐる。短篇小説に於ては事件はあまりスケールの大きくないもの。事件そのものゝ運びを直接に興味本位に扱ふのでなく、その事件が局外者に及ぼす心理的影響を取扱ふといった類の短篇に格好

な題材を捕えて、話術の巧みさにより充分面白く読める作品を多くものにしてゐる。

二三年前エリザベス・ポウインがデンマークに行つた時、盛大な歓迎を受けたそうであるが、その時ある新聞紙上に Jens Kruse といふ人がポウインの紹介文を書きその結びに

“ Advice to any future writer: Read them,

Advice to lovers of calm, well considered and deeply human literature: Read them. Joy and Merriment all over.

と書いたそうである。将来作家を志す人に一読を勧め、静かな、思慮の行きとどいた、人情味の深い文学が好きの人に一読を勧める。はじめから終りまで喜びと楽しさが溢れてゐるとの推薦の言葉であるが、話し振りは非常に面白く楽しい、そしてポウインの見る人生は不安である。人間は不幸である。それでゐる彼女の小説は面白い。

参 考 書 目

- Elizabeth Bowen: Encounters, published from Sidgwick & Jackson
- Elizabeth Bowen: Joining Charles, publ from Jonathana Cape
- “ : The Cat Jumps, “ “
- “ : Look At All Those Roses “ “
- “ : The Last September “ “
- “ : The Heat of the Day “ “
- Jocelyn Brooke : Elizabeth Bowen: Longmans, Green & Co
- George S. Fraser: The Modern Writer and His World
- pp. 182—5